

平成24年度

医学振興银杏会総会開く



受賞者一同と岸本理事長

平成24年度の医学振興银杏会総会は、5月26日に银杏会館にて開催された。佐多・楠

本岡博士の胸像に役員が献花を行った後、級会・支部交流会において、各地の支部・級

第233号

公益社団法人
医学振興
银杏会

06(6879)3501

(編集同人)

川越裕也 荻原俊男
門田守人 米田正太郎
杉本 央 武田雅俊
木村 正 黒木尚長

会・学内からの参加者が同窓会活動の近況を報告しあった。総会は早石雅有副理事長の司会で開始され、全代議員393名中書面による議決権行使および代理人委任状を含む81・4%の320名の参加を得て本総会が成立したことが報告された。岸本忠三理事長は、学友会の目的は、同じ場所で学び働いた人達が旧交を温める場を供給すると同時に、これまでの伝統を次世代に繋げるために、若い優秀な医師・医学者の育成に貢献することであると挨拶し、今後の大いなる暖かい支援を会員各位へ依頼された。

昨年の総会以後の108名の物故者へ黙祷を捧げ、勲章等受章者・学術賞表彰者への慶祝の意が表された。また、名簿委員長の前川透理事より、学友会名簿の歴史と本年から採用する新しいレイアウトが紹介された。

公益社団法人の総会議事として、渡邊幹夫理事より平成23年度の事業・会計報告と、阿部源三郎監事より監査報告が行われ、承認された。続いて平成24年度の事業計画・予算案の説明がなされ、承認された。定款の変更が承認され(別紙参照)、来年の役員改選に向けて選挙管理委員会の設置と今後の予定についても報告された。引き続き、柴木宏実理事の進行で、地域医療に関する研究助成の採択者4名と岸本基金奨学助成金の採択者14名、学友会奨学金の採択者17名への授与式が行われ、国際学術交流助成の採択者15名が報告された。

総会に引き続き、大阪大学総長の平野俊夫先生が「免疫学と共に40年」と題して、免疫学や大阪大学の歴史とも関連づけながら、自己研究の臨場感溢れる過程を講演された。続けて米田悦啓医学系研究科長、永井利三郎保健学科長、吉川秀樹附属病院院長、目加田英輔微生物病研究所所長、濱田博司生命機能研究科長から、学内の現状が報告された。その後、会館2階のレストランシネルバに移り、歓談のうちに全ての行事を終了した。

研究助成の公募

当会では、今年度も公益事業の一環として、下記の研究助成を行います。

連絡先 (FAX) 06-6879-3503

(メール) office@ichou.med.osaka-u.ac.jp

▶地域医療に関する研究助成

内容 地域医療に貢献している病院・施設で行われている疾病の診断・治療等に関する研究をしている若手研究者(40歳未満)への助成

募集期間 9月1日～11月30日

助成額 1件50万円程度

助成件数 4件

▶平成24年度国際学術交流助成(後期分)

内容 外国で行われる国際学会等(9月1日～平成25年3月31日)において成果発表をされる若手研究者への渡航費用助成。

詳細は、<http://ichou.or.jp/>にてご確認ください。

募集期間 10月1日～11月30日

第24回シンポジウム

『地域医療の課題とその対策』開催のご案内

開催日 平成24年11月8日(木) 午後3時開会

会場 银杏会館3階 阪急・三和ホール

テーマ 「超高齢化社会の医療と介護」

パネリスト 柴木宏実先生(大阪大学教授)、田村学先生(おおさか往診クリニック院長)、北川透先生(医療法人協和会 協立病院院長、大阪大学招聘教授)、伊藤裕康先生(大阪府医療監)

懇親会 银杏会館3階 大会議室

2025年には75歳以上人口が20%近くになり、要介護認知症患者は150万人を超えます。医療・福祉体制の整備を急ぐ必要がありますが、まだ試行錯誤が続いている印象です。シンポジウムでは、柴木先生から現状を概説頂き、田村先生から在宅医療を実践する立場で、北川先生からは医療経済の問題を含めて慢性期医療に携わる立場で、伊藤先生からは大阪府の行政の立場で、ご参加の皆様も交えて、近未来の高齢者医療・介護のあり方を討議したいと思います。

※参加ご希望の方は、事務局までお問い合わせ下さい。

15時半開始に変更

平成23年度秋の叙勲および褒章の受章

瑞宝重光章 青野 敏博先生 (昭35)
 瑞宝中綬章 野崎 光洋先生 (生化学)
 瑞宝小綬章 小山 博記先生 (昭35)
 瑞宝双光章 穴戸 元先生 (昭32)
 藍綬褒章 三上 裕司先生 (昭49)

叙 位

従四位 内藤 僑先生 (昭15)
 (平成23年 8月13日逝去)

平成23年度受賞

大阪科学賞 山下 俊英先生 (平2)
 吹田市長賞 審良 静男先生 (昭52)
 日本医師会最高優功賞 大城 孟先生 (昭35)
 日本医師会最高優功賞 宮城 信雄先生 (昭47)
 日本医師会優功賞 岸本 忠三先生 (昭39)

平成24年度春の叙勲

瑞宝中綬章 大川 順正先生 (昭33)

次期役員選挙にかかる候補者への
立候補・候補者ご推薦のお願い (公示)

公益社団法人医学振興銀杏会 役員選挙管理委員会
 委員長 松本圭史

本会の現役員 (理事・監事) の任期は来年 (平成25年) 5月25日に開催予定の社員総会の終結時をもって満了します。

そのため、「役員選挙規則」に従い、

- ① 全会員の中から次期役員への立候補・役員候補のご推薦を公募 (このご案内)
- ② 当会の代議員として選出されている会員の先生方による選挙 (平成25年1月に郵送で実施予定)
- ③ 平成25年5月25日の総会にて承認

の手順により、次期役員選挙を実施することをここに公示します。

つきましては、次期役員への立候補もしくは次期役員に適任と思われる会員のご推薦を書面にて事務局で受け付けます。立候補、ご推薦のご希望がごありの先生は、事務局 (下記) までご連絡いただきました所定の用紙をご送付申し上げます。(当会の Web ページ、<http://www.ichou.or.jp/>からもダウンロードいただけます)

なお、規則により役員は特定の年齢層や職種 (大学・公的病院・開業医等) に偏ることのない選出が必要です。ご配慮の上、幅広い立候補・ご推薦をいただ

けますようお願い申し上げます。(複数人ご推薦いただいても結構です) なお、役員の定数、職務などは別表にまとめております。

立候補・ご推薦の締め切りは10月31日 (必着) とさせていただきます。

役員 (理事・監事) の職務: 理事会 (定例理事会は年2回) および社員総会への実出席、監事はさらに4月の会計監査。

事務局 (連絡先)

〒565-0871 吹田市山田丘2-2

公益社団法人医学振興銀杏会

(大阪大学医学部学友会)

TEL: 06-6879-3501 FAX: 06-6879-3503

E-mail: office@ichou.med.osaka-u.ac.jp

〈代議員の任期について〉

現代議員の任期は定款第5条第6項の規定により本来ならば、来年 (平成25年) 5月25日の総会終結時までですが、昨年の4月1日が公益社団法人への移行登記日であった関係から、役員の任期終了と同時にになってしまいます。従いまして定款第5条第7項の規定を適用し、現代議員の任期は再来年 (平成26年) の総会終結時までとなります。

別表: 役員の定数

(年齢は、平成25年4月1日現在)

理 事 15~20名	45歳以下	2~4名
	46歳~55歳	4~6名
	56歳~65歳	4~6名
	66歳~77歳	2~4名
監 事 2~5名	55歳以下	0~2名
	56歳~65歳	0~2名
	66歳以上	0~2名

参考: 業務執行理事の業務分掌

(理事の中から一名ずつ選出されます)

助 成	助成事業の企画立案及び実施、助成金授与式
情 報	銀杏メディカルネットの運営、名簿の作成、ML・メールアドレスの統括
広 報	ニュース編集・発行、この法人の事業内容の広報・周知
学 術	会誌の編集・発行、シンポジウムの企画・実施
会 計	歳入、歳出の予算及び決算に関する事項、会費の徴収、経費の支出、預貯金及び金銭の保管、理事会・総会における予算・決算報告
庶 務	会議の開催、渉外、慶弔、文書の作成並びに保管ほか、いずれの分担業務にも属していないもの

公益社団法人 医学振興銀杏会

正味財産増減計算書

平成23年4月1日から平成24年3月31日まで

(単位:円)

科 目	前年度	当年度	公益目的事業	当年度内訳 共益事業	法人会計
I 一般正味財産増減の部					
1. 経常増減の部					
(1)経常収益					
基本財産運用益	3,750	3,049	3,049	0	0
特定資産運用益	346,184	293,796	286,994	6,802	0
受取会費	26,640,000	26,360,000	16,160,000	3,000,000	7,200,000
事業収益	779,800	819,000	769,000	50,000	0
受取寄付金	2,366,000	479,000	469,000	10,000	0
受取寄附金振替額	0	14,462,242	14,462,242	0	0
雑収益	301,019	358,863	358,863	0	0
他会計からの繰入額	0	0	0	0	0
経常収益計	30,436,753	42,775,950	32,509,148	3,066,802	7,200,000
(2)経常費用					
支払助成金	7,150,000	21,660,000	21,460,000	200,000	0
支払寄附金	0	1,000,000	0	0	1,000,000
地域医療ネットワーク費	1,585,113	1,561,451	1,561,451	0	0
通信運搬費	2,397,731	1,976,727	331,467	1,112,006	533,254
印刷製本費	2,092,354	1,899,396	1,152,636	696,509	50,251
コンピューター費	53,200	61,872	46,836	0	15,036
給与手当	8,952,420	9,118,119	5,470,872	911,812	2,735,435
臨時雇用賃金	0	0	0	0	0
退職給付費用	330,000	970,000	582,000	97,000	291,000
福利厚生費	2,465,158	1,932,877	717,542	100,782	1,114,553
旅費交通費	460,370	447,600	262,440	43,740	141,420
消耗什器備品費	21,960	380	0	0	380
消耗品費	3,851	5,293	3,420	0	1,873
修繕費	36,750	25,200	12,600	0	12,600
光熱水料費	127,960	113,846	56,923	0	56,923
支払手数料	695,267	630,599	70,897	3,310	556,392
減価償却費	1,313,499	1,319,151	1,145,454	0	173,697
会議費	1,351,738	1,069,373	0	0	1,069,373
新聞図書費	135,500	8,000	0	0	8,000
研修費	0	18,000	0	0	18,000
雑費	27,300	56,580	0	0	56,580
経常費用計	29,200,171	43,874,464	32,874,538	3,165,159	7,834,767
評価損益等調整前当期経常増減額	1,236,582	△ 1,098,514	△ 365,390	△ 98,357	△ 634,767
基本財産評価損益等	0	0	0	0	0
特定資産評価損益等	0	0	0	0	0
投資有価証券評価損益等	0	0	0	0	0
評価損益等計	0	0	0	0	0
当期経常増減額	1,236,582	△ 1,098,514	△ 365,390	△ 98,357	△ 634,767
2. 経常外増減の部					
(1)経常外収益					
固定資産売却益	0	50,000	50,000	0	0
経常外収益計	0	50,000	50,000	0	0
(2)経常外費用					
固定資産売却損	0	1,358,280	1,358,280	0	0
経常外費用計	0	1,358,280	1,358,280	0	0
当期経常外増減額	0	△ 1,308,280	△ 1,308,280	0	0
当期一般正味財産増減額	1,236,582	△ 2,406,794	△ 1,673,670	△ 98,357	△ 634,767
一般正味財産期首残高	88,301,513	89,538,095	79,686,023	6,832,808	3,019,264
一般正味財産期末残高	89,538,095	87,131,301	78,012,353	6,734,451	2,384,497
II 指定正味財産増減の部					
受取寄附金	0	16,500,010	16,500,010	0	0
一般正味財産への振替額	0	14,462,242	14,462,242	0	0
当期指定正味財産増減額	0	2,037,768	2,037,768	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	2,037,768	2,037,768	0	0
III 正味財産期末残高	89,538,095	89,169,069	80,050,121	6,734,451	2,384,497

ホームページでも公開しております。ホームページアドレス→<http://www.ichou.or.jp/joho.html>

助成事業採択者一覧(敬称略。平成24年5月26日総会にて授与式を執り行いました。)

1. 平成23年度 地域医療に関する研究助成 4件、各50万円

浅岡忠史:急性胆嚢炎における地域連携クリニカルパスの構築と低侵襲手術の実践

金 浩敏:肛門括約筋温存手術後の肛門機能評価ー肛門内圧検査の意義ー

高田友美:性犯罪被害者に処方した緊急避妊薬、抗生物質の追跡調査

東口将佳:抗がん医療と緩和医療の融和を目指した新たな地域がん病診連携を目指して

2. 平成24年度 学友会奨学金 17件、各20万円

学部学生:梶谷憲司、金子 雄、木津慶子、木村峻輔、小島健介、田中和典、田中康裕、西岡陽介、野瀬陽平、藤井浩平、本田 亨、松野達哉

大学院生:伊藤篤子、大橋範子、國吉佳奈子、松浦 巧、若山勇紀

3. 平成24年度 岸本基金奨学助成金採択者 14件、1年次:60万円、2年次~6年次:120万円

1年次:上田洋行、柴田明有美、寺本将行、中谷さほ、2年次:李 福章、家原卓史、3年次:中山明子、山本隆盛、4年次:栗原智樹、作田友香子、5年次:梅田大介、渡邊優子、6年次:岩村 憲、藤原政宏

4. 平成23年度 国際学術交流助成 15件、各5~10万円

井原祥一(呼免内・米)、河合達男(老腎内・米)、花本 敦(耳鼻咽・米)、藤原 誠(小児科・米)、平野 剛(運制御・中)、谷 直樹(脳神外・伊)、友永真人(整形外科・捷)、有田英之(脳神外・米)、大森洋介(循環内・米)、甲斐沼尚(心血外・米)、小玉尚宏(消化内・米)、渡部直史(核医学・米)、鈴木陽三(消化外・米)、永吉真子(公衆衛・米)、李 媛英(公衆衛・米)

寄 附 御 礼

当会の公益目的事業へご寄附をいただき、誠に有難うございました。

平成24年4月9日

養辛会(昭16.12)より、18万円をご寄附頂きました。

平成24年4月12日

岸本基金奨学助成金事業のため、岸本忠三先生(昭39)より、1,500万円をご寄附頂きました。

平成24年4月27日

大阪大学同窓会連合会より、3万8千円をご寄附頂きました。

※公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は、個人・法人とも税金控除の対象となります。詳細に関しては、当会事務局までお問い合わせください。

【学友会名簿について】

公益社団法人医学振興銀杏会 理事長 岸 本 忠 三

今年度(平成24年度)は3年毎の学友会名簿の発行年です。学友会名簿の歴史を振り返ってみますと、昭和31年10月10日に発行されました「大阪大学医学部学友会ニュース 第一号」の冒頭で、当時の学友会理事長・和田豊種先生が「大阪大学医学部学友会復興に當りて」の中で学友会名簿に関して記載されています。これによりますと、昭和18年3月第2回目の学友会名簿が発行されましたが戦局は敗色濃く、昭和19年以降、学友会の活動は自然停止し、昭和20年3月14日にはついに大学及び病院は焼夷弾の洗礼を受け、専門部校舎も病院看護婦作法室その他の木造建造物は全部炎上し、斯くして終戦を迎えました。戦後に学友会は活動を再開し、昭和26年1月に新たな会員名簿が発行され、近々、改めて会員名簿を出版する予定であることが記載されています。

今回、新たに戦前の名簿が見つかり、昭和14年に2月と12月の2回、さらに昭和16年、昭和18年に発行されていたことが確認できました。社団法人大阪大学医学部学友会の成立年月日は昭和13年6月21日であり、この昭和14年2月発行の「會員名簿」が第1回のもので考えられます。戦後、昭和26年に「會員名簿」が復活し、昭和31年に前述の戦後2回目の名簿が「学友会名簿」として発行されました。昭和39年には「学友会名簿」と改められて大きさもそれまでのものより少し大きくなってB5版となり現在とほぼ同様の様式のものになりました。さらに平成15年からはさらにA4版にサイズアップされて現在に至っています。昭和14年から数えますと、今回の平成24年度は第23回目の名簿ということになり、公益社団法人医学振興銀杏会としては最初の名簿ということになります。

現行の学友会名簿は、「本学出身者」と「他学出身者」の項目から構成されており、本学出身者は卒業年次別に卒業生名簿として記載され、他学出身者は講座・部門別に記載されています。これは、本会会員が定款第5条にもありますように、大阪大学医

学部医学科の卒業生と、それ以外に医学部医学科の教職員、さらには大阪大学で医学に関する研究に従事した方から構成されていることとも整合性がとれているかと思われます。しかしながら、大学院重点化、大学法人化等が進められると共に、医学部講座ならびに附属病院診療科の再編が進められ、単に新旧の講座の名称が異なるだけでなく、その組織自体の再編も行なわれました。これに伴い、講座・部門別に過去に所属していた会員から現在所属している会員までを名簿として記載することは困難となり、名簿記載方法の見直しが必要となって参りました。

また、学友会名簿は大阪大学医学部の卒業生名簿を兼ねてきた長い歴史があります。その一方で、学友会は公益社団法人であり、本来、大阪大学とは別の組織となっています。そのため、学友会退会者や除名者、学友会入会を希望しない医学部卒業生の取り扱いという問題も出てきています。

これらの課題を解決するために、全国の他大学の同窓会組織の名簿調査等も行ないながら、名簿作成委員会が中心となって検討を重ねて参りました。その最終案として、従来の名簿の構成を改め、住所・勤務先等の個人情報を含んだ名簿本体の部分に関しては、本学出身者、他学出身者を区別せず出身大学名を記載し、卒業年次別に掲載させていただきます。これとは別に、大阪大学医学部医学科の卒業生名簿として、卒業年次別の卒業生氏名一覧の項目を設けます。また、他学出身者の会員に関しては講座・部門別の索引も作成いたします。以上の最終案を平成24年3月16日の理事会において承認し、5月26日の定期総会において報告させていただき、本年度の名簿からは新しい様式とさせていただきます。掲載イメージを別紙にて同封しておりますのでご覧ください。

今後も当会に対するご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

アンチエイジング

トピックス

アンチエイジングと聞くと、マスコミの騒ぎが頭に浮かび、学問的でない医療という誤解をお持ちの先生も多いのではないかと思います。私が理事を務める抗加齢医学会では、アンチエイジングに関する誤解を解き、サイエンスから老化研究を進め、抗加齢医療確立を目的としている。抗加齢医学会には、現在では7400人以上の会員が所属しており、2014年には私が大阪で総会を開催する予定です。専門志向が強まる中でアンチエイジング医療は、内科のみにとどまらず、皮膚科、整形外科、泌尿器科、歯科など多くの領域にわたる全人的な医療として期待されている。アンチエイジング医療は、不老長寿を目指すということではなく、健康寿命の延伸が最大の目的であり、そのためには、図1のようにそれぞれの年齢に分け、弱点を早め

に見つけ、克服することが、重要であると考えられている。実際、100歳以上の長寿である百寿者は、これらの年齢の老化がバランスよく起こっており、弱点が少ないことが知られている。

また、より積極的なアンチエイジング医療として、①予防から根治治療への転換（予防医療では不十分で、再生医療などを利用して根治治療を行う。例えば、私の研究室でのHGF（肝細胞増殖因子）遺伝子での血管再生治療などが一例にあたる）、②低侵襲、高有効性、低副作用の治療法確立（従来の低分子化合物でなく、遺伝子治療、核酸医薬、ペプチド医薬、ワクチンなどの分子療法への応用）③活動領域の拡張（高齢者の方の社会活動を助けるために、介護用ロボットなどの医療技術の活用）、④既存薬での老化関連疾患の予防（たとえば、我々の研究室では、降圧薬であるARB（アンジオテンシンⅡ受容体阻害薬）が、糖尿病の発症予防効果を持つことや、骨粗鬆症や骨折予防効果を持つことを明らかにしている。また、ARBはアルツハイマー病発症予防効果を示すことも、最近報告している）、などの治療の考え方が示されている。

最近NHKスペシャルで取り上げられ有名になった長寿遺伝子として

知られているサーチュイン遺伝子は、ヒストン脱アセチル化酵素であり、ヒストンとDNAの結合に作用し、遺伝的な調節を行うことで寿命を延ばすと考えられている。サーチュインは、飢餓やカロリー制限、赤ワインに多く含まれるポリフェノールの一種、レスベラトロールによって活性

化されることが知られているが、最近ARBなどの薬剤によっても活性化されるとの報告が出ている。今後、老化の分子機構が明らかになるにつれ、より科学的なアンチエイジング医療が普及することが期待される。臨床遺伝子治療学寄附講座 森下竜一（昭62）

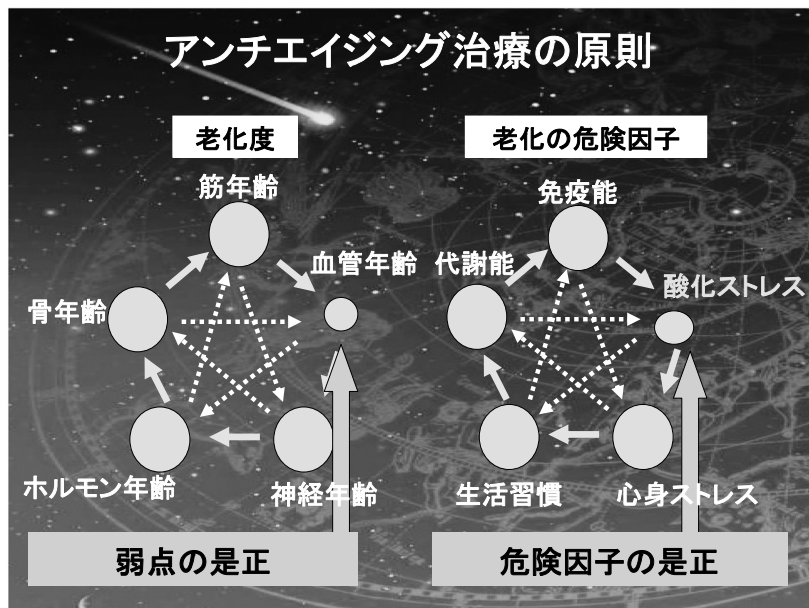


図1

提

言

チーム医療という言葉は古くて新しい言葉である。わが国では昭和45-50年頃から使われていたようである。大阪府下のある公立病院では平成の初め頃までは病院内でチームとして医療を行っていた部門は一部であり、病院内の横断的なチーム医療よりも診療科を中心としたものであった。

た。当然この時代にも先進的な病院はあったがチーム医療という言葉が最近やっと根付いて来たようであり、当時と比較すると隔世の感がある。チーム医療を推進するためには、厚生労働省では平成21年8月から「チーム医療の推進に関する検討会」を開催、平成22年5月にチーム医療を推進するための具体的方策の実現に向けて「チーム医療推進会議」、同年10月にチーム医療推進方策検討ワーキンググループを立ち上げている。「チーム医療推進のための基

本的な考え方と実践的事例集(案)」では、医療の質的な改善を図るためには、①コミュニケーション、②情報の共有化、③チームマネジメント、効率的な医療サービスを提供

4月の診療報酬改定でも幾つかが取り上げられている。栄養サポートチーム、呼吸ケアチーム等である。平成24年4月の診療報酬改定では、外来緩和ケアチーム、薬剤師の病

チーム医療

するためには、①情報の共有、②業務の標準化、を挙げている。そして診療報酬に担保されたチーム医療が増加していることもチーム医療拡大の推進力となっている。平成22年

棟業務、精細科のリエゾンチームなどが新たに認められた。質が高く、安心で安全な医療が求められる状況になり、多種の医療専門職が各々の専門性を前提としてお互いに連

米田正太郎(昭45)



…その134

私は昭和28年の阪大医学部卒業後は病理教室の一員である。教授も務めた。しかし、本業の人体病理に不熱心で実力不足であり、ステロイド生

化学に情熱を示す病理の変わり者と考えられた。私の入室当時の二病理は性腺の研究をしていたが、病理教室であるから研究には形態学だけを使用していた。当時形態学で広

く用いられたステロイド染色は、微量のステロイドを溶解している多量の脂質を染色しているにすぎないことを理化学部の協力で明らかにしたので、性腺の研究を進めるためには、当時の組織化学を用いる形態学だけでは不可能と考えた。当時発展期であったステロイド生化学を教室の性腺研究発展のために強引に導入したが、深入りしすぎる事になった。

シオノギ研究所の山口健二博士は一病理の研究生でもあったが、昭和40年頃に、多くの自然発生マウス癌中に雌で増殖しない癌があるので、武田

所長のもとでの協同研究を申し込まれた。このシオノギ癌は、雄、アンドロゲンを投与した雌と去勢雄雌で増殖したが、雌、去勢雄では増殖しなかった。シオノギ癌は当時で

研究費を含めてシオノギ研究が負担し、私は研究計画の相談、論文の作成を担当した。その結果、アンドロゲン非依存性癌が容易に生じること、その機序、種々の内分泌療法の有

他力本願

は唯一の性ホルモン依存性癌モデルであったので直ちに有名になり、依頼を受けた欧米の有名な性ホルモン研究者に

効性の比較等を明らかにした。昭和55年頃から、性ホルモン依存性癌の増殖は、癌が性ホルモン誘導性に産生する増殖因子の作用によるのではと

考えられるようになった。し

松本圭史(昭28)

診療科 紹介

泌尿器科

泌尿器科という科は、泌尿生殖器系の疾患（女性の生殖器は除く）を取り扱う科であり、欧米においては外科の一部として位置づけられています。しかし、我が国では歴史的に皮膚泌尿器科として始まり、途中で泌尿器科単独として独立したという経緯があります。取り扱う疾患の範囲は広く、泌尿生殖器系の癌、感染症、尿路結石症、前立腺癌大症、排尿機能異常、男性不妊症をはじめ、腎移植までが含まれます。腎移植に関しては、3代前の楠教授時代に端を発し、常にこの分野で日本をリードしてきました。また、男性不妊症についてもその原因遺伝子に関する基礎的研究と平行して最新の生殖医療技術駆使して男性不妊症に悩む多くの患者さんを助けてきました。私は、入局してすぐに先代の教授である奥山明彦先生に師事して、男性内分泌

学の研究を始めました。この分野は泌尿器科の中でも、ややニッチな領域と言っても過言ではなく、当時の日本の泌尿器科の臨床あるいは研究面での主流は尿路結石症や腎移植あるいは尿路性器癌であったように思います。内分泌学の分野における臨床・研究が、次第に前立腺癌という非常にユニークな癌の臨床・研究につながっていく結果になりました。なぜなら前立腺癌は男性ホルモン（アンドロゲン）に依存して増殖するという特徴を有し、ホルモン療法が極めて効果的であるからです。このホルモン療法（去勢）が有効であることを1941年に発表したCharles Hugginsはその功績によって1966年にノーベル医学・生理学賞を受賞しています。その理念は今も残っていて、現在のホルモン療法もその理念に支えられていきます。

現在、当診療科の主流は人口の高齢化を反映して、泌尿生殖器の癌であります。中でも前立腺癌は増加の一途をたどり、毎週のように手術や放射線治療が行われています。近々手術支援ロボットDa Vinciが導入される予定です。早期癌だけではなく、ホルモン療法が効かなくなった去勢抵抗性（かつてはホルモン抵抗性と呼んでいた）前立腺癌もその一方で増加しており、日常診療における大きな課題となっています。この分野では阪大オリジナルの治療レジメンが我が国に広く普及しており、診療ガイドラインにも取り上げられています。また阪大病院は早期前立腺癌に対する根治的治療の多くのオプションを有する数少ない施設であり、しかも、優れた治療成績のみならず合併症を少なくしたQOLの高い治療を目指し、実践しています。最近では、

遺伝子治療学講座（金田安史教授）との共同研究によって、去勢抵抗性前立腺癌に対するHVR-E（センダイウイルス）を用いた遺伝子治療を開始し、今後の成果が期待されます。また、前立腺発癌に関する基礎研究にも取り組んでいます。前立腺の発癌においても、胃癌や肝癌と似て、「炎症」が重要な役割を担っていることが明らかになりつつあります。

癌の診療のみならず、生殖医療や腎移植についても我が国のトップを走っています。我が国は現在、少子化という問題にも直面していますが、なかには子供が出来ないということで悩んでおられるカップルも少なくありません。そのようなカップルのうち、半分は男性側の因子であるといわれています。現在、生殖医療センターとして、産婦人科と協力して、これらの不妊カップルの治療に取り組んでいます。

臨床と研究の一体化が我々の目指すところであり、基礎的な研究を臨床に還元できるような努力をしています。広い分野において、関連施設と一体化した優れた臨床研究を行い、

世界に発信出来るよう頑張っております。大阪大学の「地域に生き、世界に伸びる」という標語にマッチした研究と診療を推進してまいります。今回は神経内科・脳卒中科

の望月秀樹先生にお願いしました。

野々村祝夫（昭61）

